コラム

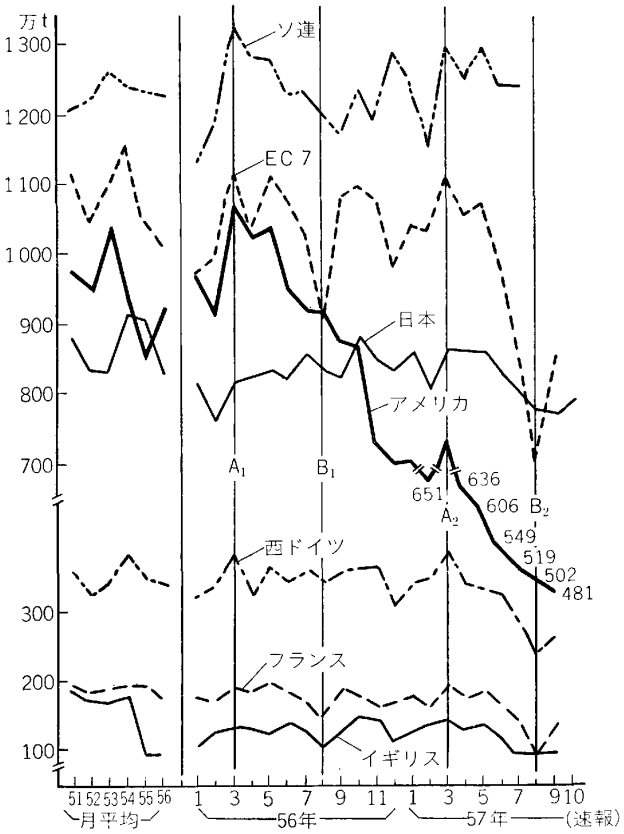
粗鋼の生産性の推移にみる人間性

図は昭和51年から57年にかけての世界主要国の月平均および毎月の粗鋼生産量の推移である．図の左縦軸に近い部分は，昭和51年から56年に到る7ケ年間の月平均生産量である．ここで気がつくことは世界2大国である米国とソ連邦の生産量推移が全く同じ傾向を示すことである．これは偶然にも一致したものであろうか．体制の全く異なる米，ソ両国と言えども，こと鉄鋼生産量に関しては案外同じような要因が働いているのではあるまいか．さらによくみると，この米，ソ増減のパターンはちようど一年遅れでEC-西独-日本が追つているように思われる．

さて，図の右側部分は昭和56年と57年の月ごとの粗鋼生産量の推移である．その増減の傾向を追つていくと一つの傾向のあることがわかる．図中 A_1, A_2 両線で示した各年3月の生産量は大小の差はあつても前月に比べて，いずれも上昇していることがわかる．いつぽう B_1, B_2 線で示した各年8月の生産量は前月に比べて降下していることがわかる．この3月，8月の傾向は，ソ連のような計画経済の国も，米国をはじめとする自由経済諸国も全く同じ傾向を示している．全く奇怪な現象である．ここで共通していることは，いずれの国も北半球に位置することである．この事実からいえることは季節が共通して変わつていることである．洋の東西，体制のいかんを問わず，寒い冬から開放される3月には人々の心も開放され意欲的になる結果，自ずと生産性も向上するのではなかろうか．逆に，夏の疲れがたまる8月には人々の労働意欲が低下するのか，生産性も降下している．これまで現在の鉄鋼業は装置産業といわれているが，その鉄鋼業といえども，季節要因といつた従事する人間の意欲に支配される部分がまだ多分に残されているのではなかろうか．将来南半球の国々の各月生産推移を調べる機会があればさらに面白い結果が得られるものと思われる．

((株)神戸製鋼所中央研究所　森　隆資)

主要国の粗鋼生産高推移



(鉄鋼界報第1286号(昭和58年1月1日)より転載)

編集後記

▶昨年実施いたしましたアンケートによれば，会員の皆様の本誌の評価は，内容，質ともに「適当」が73.9%，「役に立つ」が74.3%であり，皆様が本誌を高く評価していることがわかりました．また，昨年3月より実施しております論文頁数削減の効果が現れはじめ，掲載までの期間も，手続きが順調に運べば念願の一年を切れるようになつて来ました．したがつて，編集の基調は，ここしばらくは現状維持となるでしよう．

他方，最近鉄鋼業界の新しい分野，新しい素材を求める動きが活発化しております．ニューセラミックス，炭素繊維，アモルファス，チタン，複合材料，電子材料，高合金……．鉄鋼会社の事業内容の境界がしだいに怪しくなろうとしています．これを受け鉄鋼関係者の業務内容が多様化し，従来にもまして広い知識が必要となつてきました．いわゆる「鉄鋼関係者の業務」以外の業務に携わる機会が確実に増加しております．「本誌が扱う範囲をどこまでにするか」が編集委員会でも話題になりそうな気配です．そのうち皆様のお知恵拝借となりそうです．　(K.A.)